

父殺しとおじさんの交換: アレックス・ウェディング 『エデとウंक』(1931)におけるエデの成長につ いて

著者	佐藤 文彦
雑誌名	金沢大学歴史言語文化学系論集. 言語・文学篇 =Studies and essays. Language and literature
号	8
ページ	29-43
発行年	2016-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/47498

父殺しとおじさんの交換

—アレックス・ウェディング『エデとウンク』（1931）における エデの成長ついて—

佐藤 文彦

1 アレックス・ウェディングとその受容史

戦後東ドイツを代表する社会主義児童文学の作家アレックス・ウェディング（Alex Wedding, 1905-1966）について、今日、ドイツ文学や児童文学の世界で語られることはほとんどない。今世紀に入り、彼女の祖国オーストリアの研究者たちがウェディング再発見に取り組み始めたが、¹ ドイツ本国においては、消滅してしまった国家の消滅してしまった文学を象徴する作家のひとりとして、いまだ忘却の闇に沈んだままというのが大方の見方だろう。

1931年にベルリンでデビューしたウェディングは、KPD（ドイツ共産党）の党员だったため、また、夫 F. C. ヴァイスコプフ（Franz Carl Weiskopf, 1900-1955）がユダヤ系（チェコ人）作家だったため、1933年にプラハへの亡命を余儀なくされる。² その後、ふたりはパリを経てニューヨークに移動、戦後はチェコスロヴァキア大使館に職を得たヴァイスコプフとともに、ウェディングもまた、ワシントン、ストックホルム、北京に滞在する。1953年、ウェディングは20年ぶりにドイツ（東ベルリン）に帰国する。そして亡くなるまで、この地の社会主義児童文学の発展に寄与することになる。

ウェディングのデビュー作『エデとウンク』*Ede und Unku*（1931）は、両大戦間期ベルリンを代表する左翼系出版社 Malik から出版された。³ すでに30年代にデンマーク語・英語・チェコ語に翻訳された事実からもわかる通り、⁴ この長編小説は発表当初からそれなりに評価された。しかしこの小説の受容史を語るうえで特筆すべきは、戦後、ウェディングが東ドイツに帰国してからたどった数奇な運命であろう。ウェディングが帰国した翌年の1954年、『エデとウンク』は東ベルリンの Kinderbuchverlag から再版される。そして1985年までの30年余のあいだに24刷まで版を重ねた。1972年から1987年にかけては教科書版も出版されている（6刷）。1980/81年には映画化もされた。⁵ しかし90年代に入り東ドイツが消滅すると、この小説の出版は途絶える。世紀をまたぎ、ようやく次の版が出たのは、ウェディング生誕百年を迎えた2005年のことだった。⁶ この点で『エデとウンク』の受容史は、ウェディングその人の受容史と重なり合うと言えるだろう。

本論はその『エデとウンク』について、主人公である少年エデの成長の軌跡を、彼の父

親ならびに彼を取り巻く父以外の成年男子（おじさん）との関係を軸に考察するものである。なるほどこの作品の読みの試みとして、両大戦間期ベルリンの描写に注目したり、そこに生きる子どもの世界に大人の社会の縮図を見て取る態度、あるいはシンティというモチーフにこだわってみることなども、じゅうぶんに意義あるものと思われる。⁷しかし論者は今回、この小説をあえて「男の物語」に限定し、ひとりの男の子の成長とそれに関与する大人の男たちに焦点を当てて読んでみたい。もつともその背景には、もうひとりの表題主人公、ウンクに代表される「女の物語」もまた透けて見えるのだが、論者の主たる関心がケストナー（Erich Kästner, 1899-1974）と同時代に生きた女流作家ウェディングの描く「男の物語」にあるということは、本論に入る前に強調しておきたい。

2 作品のあらすじと語りの特徴

「少年と少女のための長編小説」Ein Roman für Jungen und Mädchen という副題を持つこの小説の舞台は1929年10月のベルリン、物語は12歳の少年エデの父マルティン・シュパーリングが、金属旋盤工の職を解かれるところから始まる。おかげで日曜日に予定していた家族のピクニックは中止、エデはひとり訪れた遊園地で、シンティの少女ウンクと知り合う。ウンクは一家が曲馬場に貸し出したポニーを引き取るため、遊園地に来ていたのだった。

週が明け、エデは家計を助けるべく、子どもでもはたらける職場について思案する。そしてクラスメイトのマクセの家を訪れる。するとエデは共産主義者であるマクセの父から労働者の団結について諭される一方、マクセの母の口利きで新聞配達の仕事を得る。他方、シュパーリング家に入出入りする元郵政局長のアーベントシュトゥンド氏は、父マルティンに臨時の職を斡旋する。この朗報にエデの両親は大喜びするが、エデはマクセとの会話から、父に斡旋された職がAEG⁸のスト破りでないかと推測する。そのことを確信したエデは、父の目覚まし時計をこっそり解除し、父がスト破りに加担するのを未然に防ぐ。

翌日、エデはマクセを伴ってウンクの一家を訪問する。緑のワゴン車に大家族で暮らすシンティの生活を目の当たりにしたふたりは衝撃を受ける。エデはこの日の午後から新聞配達に従事する。ウンクもそれに同行する。配達の間、AEGのストに関する記事を読んだエデは、父がこのストに関与し、暴力沙汰に巻き込まれなかったことに安堵する。しかしこのストでピケを張った労働者が警察に拘束されたことも知り、マクセの父の無事を心配する。この休憩中、エデは月賦で買ったばかりの自転車を盗まれるが、偶然通りかかったウンクのおじの助けで取り戻す。

帰宅後、エデは初めて稼いだ金を両親に差し出す。両親はウンクも歓待し、ふたりの交際を認める。その頃、マクセの父は警察の追跡を逃れて潜伏していた。エデとウンクは彼をシンティのワゴン車にかくまうが、警察のスパイを見つけたエデは、この共産主義者を

自宅に連れ帰ることを決意する。帰宅したエデはアーベントシュトゥンド氏の前で、彼が父に斡旋した臨時職の真実を暴露する。父マルティンもスト破りには協力しないと宣言し、アーベントシュトゥンド氏と決別する。そこにマクセの父が、隠れていたたんすの中から現れ、それまで共産主義者を毛嫌いしていたマルティンと和解する。マルティンはマクセの父に、明朝 AEG のストに参加することを約束する。

全 8 章から成るこの小説の語りの特徴のひとつとして、エデやマクセら、貧しい子どもたちの話す若者言葉が、おもに直接話法で書かれている点が挙げられよう。新聞配達やマッチ売りに従事せざるを得ない彼らの学校生活は、作中ほとんど言及されない。その代わり、新聞集配所で「デモごっこ」に興じることもあれば、街頭で警察の眼を避けながら児童労働にいそしむ彼らの日常の話し言葉が、実に巧みに活写されるのである。

加えてウंकとその一族が口にするシンティの言葉も、この小説の言語世界を豊かなものにしてている。マクセから新聞配達のいろはを学ぶエデは、聞き覚えたばかりのシンティの言葉を得意げに披露する。

「Spedition って何なの」エデは敬意を込めて聞いてみた。

「そんなことも知らないの。お店みたいなもんだよ。新聞少年が集まって新聞を受け取る場所。そこから配達に行くんだ。週に一回、長い髪のハインリヒがお金もくれるよ」

「Kutsch mami! 誰だって」

「え、いま何て言ったの。急に片耳が見えなくなったのかと思った」

「Kutsch mami って言っただけだよ」 Spedition という語を教えられたばかりのエデは自慢げに言った。「ジプシーの言葉で、まあおばあちゃん、くらいの意味かな」(41)

聞き慣れない言葉を耳にしたマクセが、本来なら「片耳が聞こえない」 auf einem Ohr taub sein と言うべきところを、あえて「片耳が見えない」 auf einem Ohr blind sein と言ってしまふところに、この世代特有のふざけた言葉遊びが見て取れる。

ところで同世代の子ども同士のリアルな会話を楽しむ児童文学の読者、すなわち現実の子どもたちは、時おり筋の展開を中断した語り手によって話しかけられる。エデが新車の自転車を飛ばす場面では、語り手は次のように登場する。

エデは自転車を猛スピードで飛ばし、すぐ前のバスに近づいた。ハンドルをしっかりと握り、ぴったりとバスのうしろに付ける。(読者のみなさんにこんな運転を勧めているわけじゃないですからね。危ないですよ!)(98)

あるいはある日のシュパーリング家の夕食のメニューについて、マーガリンのメーカー名まで細かく描写したあと、語り手は以下のように弁明する。

(前略) みなさんのなかには、こんな献立がお話にも何の関係があるの、と言う人もいるでしょう。だけど何でもかんでも知りたがる子どももいますし、とくに食べるものがない場合、ひとはどんなものを食べるのかということが、実は大切なことだってあります。(108)

両大戦間期ベルリンに生きる子どもたちの生き活きとした会話や語り手の度重なる介入など、『エデとウンク』の語りには、ケストナー作品の語りと共通する点が多い。しかし両者の決定的な違いは、ウェディングの場合、失業した労働者や共産主義者、あるいは都市の周縁部に生きる被差別者(シンティ)といった、ケストナー作品の人物に比べ、より生活が困難な階層が積極的に取り上げられ、彼らの子どもを中心に据えて物語が展開される内容面にこそある。その政治性、イデオロギー的側面の強さが、のちの受容史の偏りに作用した事実はすでに紹介した。次章以降、この小説の中心テーマを「少年エデの成長物語」と見なす本論文では、エデに影響を与える成人男性に焦点を当て、彼らのエデに対するはたらきかけについて検討する。

3 父殺し

本章では、エデと父親の関係について考察する。エデの実父マルティン・シュパーリングは、これまで会社の経営を改善する提案を行ったり、ストに際して会社を守る側に立ったにもかかわらず、物語の冒頭、突然解雇される。

(前略)「奴ら(引用者注:経営陣)に言わせると合理化のせいなんだ。時代には逆らえない。いまや人間の代わりに機械が仕事をする。そして競争…。だけどどうして俺なんだ。よりによって俺が首になるんだ。そんなのおかしいだろう!」(10)

やり場のないマルティンの怒りや八つ当たりの矛先は、必然、家族に向けられるようになる。放課後にアルバイトをして家計を助けたいと訴えるエデに対する父の反応は冷たい。

(前略)「新聞配達くらいならできるよ、父さん。クラブンデとこのマクセだって、お父さんが失業していた時、やっていたもん」

すると父は突然「クラブンデ、クラブンデって、お前は俺が共産党のクラブンデの話は聞きたくないと何回言えばわかるんだ。俺はあんなのになりたくないんだ。わかった

か」と怒り出した。(11)

父子の口論を仲裁しようとする妻に対しても、マルティンの興奮は収まらない。

「口出ししないでくれ。息子にとって父親の言うことが絶対なんだ。俺がいま職なしなのは俺の問題で、エデには何の関係もない。最後に言うがエデ、今後いっさいクラブデとは付き合うな。わかったな」(12)

「世界がある限り貧富の差はなくなる」(12)とする父マルティンの考えを、エデも次第に受け継ぐようになる。そんなエデと共産主義者の息子マクセの対話は、さながら父親の世界観を受け売りする男の子同士の代理戦争のようである。以前にストを先導したため、父親が舐められたことがあるというマクセに対し、エデは次のように反応する。

「うちの父さんがよく言ってるよ、ストなんかやったって無駄だって。そそのかされる労働者はバカだよ」

マクセはあざけるように笑った。「何を言ってるんだ。それこそバカ以上のバカだよ。お前の父ちゃんがどうなったか見てみろよ。やっぱり首になったじゃないか。うちの父ちゃんはいつも言ってるよ、みんなが力を合わせたらこんなことにはならないって。逆にストをしないから、俺らをだましてもうける奴が出てくるんだ」(41)

父が失業したばかりでうろたえるエデに対し、マクセは「悲しんでいたって始まらない」(41)と力強い。こうしてエデはマクセに励まされつつ、徐々に自分で新しい世界を開拓することになる。それは父親を中心とした家族の庇護下から離れることを意味する。

この日の午後、エデの家に元郵政局長のアーベントシュトゥンド氏が来訪する。彼がどういう経緯でシュパーリング家と付き合いようになったのか、作中、明らかにされることはないが、両者の関係が長いことは窺い知れる。エデは父親の失業を知った直後のこの男の反応を、冷静に観察する。

(前略) 父さんは心配そうに頭を抱え込んだ。「いったいどうやって生きていけばいいんですか。職安で文句も言いましたが、それで何になるんですか。われわれなんてただのひとりにすぎないんだ」

「シュパーリングさんよ、そんなにかっかしなさんな。人はパンのみにて生きるにあらず。神さまが助けてくださいますよ」

アーベントシュトゥンドの口元にこぼれた微笑がちらっと浮かんだ。この人は本心からそう言っているわけじゃない、エデはすぐに気づいた。(48-49)

エデとアーベントシュトゥンド氏の関係については次章で考察する。しかしここで確認しておきたいのは、これまで父親を中心としたシュパーリング家のあり方や交際相手は無批判に受け入れてきたエデが、父の失業をきっかけに、初めてみずからの判断をはたらかせ始めたということである。この直後、年長のアーベントシュトゥンド氏に口答えしたため、エデはいつものように父から殴られることを覚悟するが、母の機転で難を逃れる。

「急いでジャガイモを 10 ポンド買って来て、エデ。お財布はここ。つけにしてもらってね。ほら、早く」母さんが大声で言った。父さんが咳払いをして何か言おうとした時には、エデはもう玄関を出てしまっていた。おかげで今回は目を青く腫らさずに済んだ。

エデは玄関口で立ち止った。実際のところジャガイモはそんなに急ぎじゃなかった。(中略) ちょうど陽がまた差して、エデの顔を照らした。エデは扉にもたれて、気持ちよさそうに目を細めた。すべてが変わってしまったみたいだ、と思った。急に父さんは前みたいに厳しくなくなったし、普段はどれだけほめてもほめ足りないアーベントシュトゥンドにもちゃんと言い返していた。それにしてもあの郵政局長さんはおもしろい奴だ。いや、あの人はずっとそうだったのかもしれない。エデがいま気づいただけだ。父さんが失業してからというもの、エデは世界を新しい目を見て、新しい耳で聞くようになった。(53)

実父の支配を逃れ始めたところで、12 歳の少年がすぐに独り立ちできるわけではない。同じ日の夕方、エデは初めてマクセの家を訪れる。そしてマクセの父と知り合う。それ以前、共産主義者に対するエデのイメージは、根深く父の影響下にあった。

(前略) マクセの両親をエデはまだ知らなかった。エデは初めて目にする共産主義者がどんな人なのか、わくわくしていた。泥棒や悪いことをして警察の目を避ける人みたいに、ひそひそ話をするのだろうか。

エデは少し不安だった。だって父さんが以前、赤は何でも分けようとする、と言っていたことを思い出したから。コートなしで帰る羽目になったらどうしよう。(54)

先入観を持って対面したマクセの父は、エデの実父とは正反対の父親像を体現していた。クラブンデ家の父子関係は、エデの想像の埒外にあったのである。

「うちの親には思ったことをはっきり言わないとだめだからね」マクセはそう言って父親に笑いかけた。「ここでは率直に話していいんだよ」

エデはマクセの父親に対しすぐに信頼を抱いた。恥ずかしさはなくなった。(55)

こうしてエデはマクセの父に実父の失業を打ち明ける。父から仕事を奪ったのは工場に導入された新しい機械のせいだ、と言うエデに対し、マクセの父は怒鳴らずにそれを正そうとする。息子から側転や柔術を習ったこともあるという彼は、「君の考えが正しいのなら、喜んで教えてもらおうと思うよ」(57)と、視線をエデと同じ高さに合わせて接しようとするのである。

しかしけっきょくのところで、エデがマクセの父を説き伏せることはなかった。逆にマクセの父が、マルティン・シュパーリングの失業の原因は機械ではなく、機械を独占する人間のせいだということを論じ、労働者の団結をエデに説くのである。その際に彼はあるたとえ話を披露する。それは10人の男の子が無人島に漂着し、ひとりが魚を獲る網を独占した上でもうふたりを味方に付けた結果、残りの7人が搾取される不平等を描写し、その解決策をエデたちに考えさせるものだった。

(前略)「だけどもし僕たち七人がいっしょになって三人の悪党に向かって行ったら、こっちが勝つにちがいない。そうなったらすごいね。網だってみんなのものになるんだから」

「まさにそれが問題の核心よ」クラブンデ夫人は戦いを挑むように目を輝かせて言った。

「そうだ、団結だ。労働者が人間らしく生きるためには、団結することが大事なんだ」クラブンデさんはそう言って、再び席に着いた。「わかったかい」

「もちろんだよ!」エデとマクセは元気よく言った。

「そのことを忘れちゃいけないし、そうなるように努力しなきゃいけないんだ」クラブンデさんは言った。

しばらくは静かだった。だけどもまたみんな元のようにテーブルを囲んだ。エデは自分もこの家族の一員のように感じた。(60-61)

クラブンデ家で共産主義に目覚めたエデが起こした行動はすでに紹介した通りである。父マルティンがスト破りに加担し、労働者の団結を妨げようとするのを、事前に察知して防ぐのである。この点でエデは実父よりマクセの父の考えを優先して振る舞ったと言える。いや、そもそもエデの父に考えなどなく、アーベントシュトゥンド氏に操られるがままだったのを、賢明な息子が救ったと言えるかもしれない。

『エデとウंक』という表題主人公ではないものの、この物語、とりわけエデの成長過程において、マクセという少年が果たす役割は大きい。エデはこの同級生を通じて、初めてシュパーリング家とは違う家族のあり方に触れた。しかしそこで彼がもっとも影響を受けたのは、マクセ本人ではなく、マクセの父だった。その証拠に、この小説の終盤にマクセは登場しなくなり、もっぱら彼の父親が(息子に代わって)エデと逃避行を企てるよう

になる。小説の最後、エデの仲介によってマルティン・シュパーリングとクラブンデが和解する場面は、次のように締めくくられる。

(前略)「さあ来い、エデ」父さんがまじめな声で言った。

急に厳しい声でしたので、シュパーリング夫人は不安げに耳をそばだてた。エデも父さんがびんたをくらす時みたいに腕を振り上げたから、殴られるのかとびっくりした。だけどその代わりに父さんは、片方の腕でエデを抱き上げ、もう片方の手をクラブンデに差し出した。(123)

妻／母／夫人を差し置いて3人の男の結束が高らかに謳われるこの場面をもって、「男の物語」としてこの小説は頂点に達する。しかしこの3人が今後、同じ力関係でトロイカ体制を組み続けられるかということ、論者はそうは考えない。いまやエデの精神的な父親はクラブンデ氏であり、マルティンがこれまでのようにエデを暴力で押さえつけることはできないだろう。新たにクラブンデという思想上の父を得たエデが無知な実父から学ぶことなど、もはや何もないのではないか。上記引用箇所を抱擁は、殴打に代わってマルティンが息子に対して行使し得る、肉親ゆえの身体的コミュニケーションの限界を表しているように思われる。エデにとって実父の失業は実父の失権を意味した。そしてこれを機に、少年は実父とは別の、実父よりの確にみずから導いてくれる新しい父親を選び取ったというのが論者の読みであり、それをエデの「父殺し」と呼びたい。

このように、この小説はひとりの少年が大人の世界、男性的な政治の世界に足を踏み入れるまでの様子を描く一方、他方では彼がまた、まったく別の家族と知り合い、本章で考察した男性原理では収まりきらない、新たな世界観を獲得する様も描いている。そのきっかけを与えるのがもうひとりの表題主人公、ウंकである。次章では、エデがウंकと出会ってどう成長するのか、シンティの少女は彼に何をもたらすのかということについて考えたい。その上で、少年の成長にとって父親とは異なる成人男性（おじさん）が果たし得る役割についても、私見を述べたい。

4 おじさんの交換

アレックス・ウェディングを単に左翼的・政治的なケストナーとして片付けることができない要因のひとつに、彼女が『エデとウंक』において、両大戦間期ベルリンに生きるマイノリティ（シンティ）の実態を書き残した功績が挙げられる。のちに作者自身が明かしたところによると、エデとウंकには実在のモデルがいた。⁹ さらにのちの研究は、ウंकのモデルと目される人物が、1943年にアウシュヴィッツで死去したことを突き止めている。¹⁰

ナチスの台頭前、この作品が書かれた 1930 年前後のベルリンで、シンティはどのような生活を強いられていたのか。物語の冒頭、エデとウルクが遊園地で出会い、仲よくなるきっかけを与えるのは、見知らぬ少年の次のひとと言った。

「ジプシーが子どもをさらおうとしているぞ」鼻までウールのマフラーをした太った男の子が口出した。「さっさと逃げないと、ジプシーにぼこぼこにされるぞ」

「何を言ってるの」エデはびっくりして聞き返した。

「わかっているくせに」男の子は真剣な表情で言った。「ジプシーは子どもを誘拐して殺すんだよ。それからソーセージや挽き肉にして売り飛ばすんだよ」

「うそつき！」小さな女の子は大声で叫び、男の子につかみかかろうとした。(25-26)

エデはこの少年をウルクに代わって蹴散らすことで、彼女の信頼を勝ち取る。そして寒そうにしているウルクに自分の上着を着せようとするが、彼女はそれを拒絶する。

「ウルクは大丈夫」そう言って女の子は要らないというしぐさをした。「あたしが盗んだって言われそうだもん」(26-27)

ここにもまた、大人の偏見が子どもにまで蔓延している様が窺える。さらにその偏見にさらされながら、健気に振る舞おうとするシンティの少女ウルクの姿は痛ましい。

エデはウルクに出会うまで、ベルリンにシンティが住んでいることすら知らなかった。したがって彼はウルクの身の上話に多大な関心を示す。例えばウルクは鞍なしでポニーに乗れる。母親は占い師をして日銭を稼いでいるが、実はその道の心得などない。母の収入がなく、朝食にありつけない時、ウルクは学校に行くふりをして、散歩に出かける。そして教師への詫言状は自分で書く。なぜなら母は非識字だから、など。それらの逸話はエデにとって「インディアンの本よりおもしろい」(29) ものだった。

他方、一族とともにワゴン車で暮らすウルクは、エデの住まいの階段・水道・水洗便所がうらやましいと言う。しかしエデとて、決してウルクが思っているような金持ちではない。その証拠にエデはこの日、父親が毎週日曜日の楽しみにしていた葉巻を一本、ウルクから譲り受けるのである。それはウルクの祖母の吸いさしだった。

「え、何だって。君のおばあさんは葉巻を吸うの。おじいさんの間違いでしょう」

「何、おばあちゃんが葉巻を吸ったらいけないの。パイプだって吸うよ」(34)

続いてウルク自身も「毎日煙草が二本あれば満足だ」(34) という発言を聞くに及んで、エデは驚きを通り越して呆れ返る。それはさておき、ここで興味深いのは、ウルクの語る家

族に父親がいっさい登場しない点である。彼女の一家の長は上述の祖母であり、この祖母を中心に、ウルクの母やおじ、従姉妹や従兄弟、さらに馬やポニーや白猫が、ともに暮らしているのである。

ウルクたち、シンティの暮らしぶりは、エデとマクセがワゴン車を初めて訪問した場面で詳述される。その際にふたりの若者を歓待し、もっとも印象的な振る舞いを見せるのは、ヌッキーおじさんだ。彼はエデとマクセに煙草を勧めるが断られると、腕にほどこした刺青を自慢げに披露する。さらに年少の男の子たちに何を見せようと思ったのか、ズボンを下ろし始めたところ、家長の祖母にたしなめられる。その後、ヌッキーおじさんは、エデとウルク、そしてマクセの求めに応じてヴァイオリンを奏でる。演奏するのはもちろんジプシー音楽だ。

ヌッキーはしばらく彼らにお願いをさせていたが、もちろん最後には折れて、ヴァイオリンでジプシーの歌を演奏した。みんなはいっしょに歌ったが、歌詞を知らないマクセとエデだけは歌えなかった。悲しい場面では車全体がむせび泣き、明るい場面ではチビの男の子（引用者注：ヌッキーの子）が指を口に当てて音を鳴らした。（87）

四十男が母親に怒られてはむくれ、褒められては素直に喜ぶ様子は、エデにとって新鮮に映ったに違いない。それは彼にとって、父親とは異なる大人の男性のあり方として、初めて目にした姿だったはずだ。

この小説の中でヴァイオリン（Geige）を手にするのではないものの、この単語を口にする人物がひとりいる。エデの家に入出入りするアーベントシュトゥンド氏である。彼はエデに対し、次のように呼びかける。

（前略）「大人の言うことをよく聞きなさい。お前はまだおちびちゃんだから、幸せいっぱいだろう。しっかり勉強して、お父さんとお母さんを喜ばせるんだぞ」（51）

父の失業によって収入を絶たれたシュパーリング家の息子が「幸せいっぱい」であるはずなどないにもかかわらず、現実を直視しないアーベントシュトゥンド氏は、*jemandem hängt der Himmel voller Geigen*（幸福に酔い痴れる、有頂天である）という雅語を口にする。天空でヴァイオリンなどの楽器を手にする天使を描いた宗教画に由来するこの文語表現が、この場面にどれほど似つかわしくないか、あらためて論じるまでもないだろう。

生き活きとした子どもの語り口が特徴的なこの作品において、アーベントシュトゥンド氏が口にする空疎な定型表現、杓子定規の決まり文句は異彩を放っている。そういった言葉で話される内容は、きわめて保守的な、体制側の価値観を類型化したものであり、その意味で彼はこの物語の悪役を一手に担っていると言えるだろう。エデの父マルティンに対

する彼の発言から、典型的な例をふたつ引用する。

「シュパーリングさんよ、私の前でお上を悪く言うのはおよしなさい。とにかく政治には関わらないことです。政治は人間をダメにするというじゃないですか。元郵政局長としての経験談ですがね、役人はよくやっていますよ。公共の福祉以外、何も望んじやない。それでもやっぱり貧困はあるんです。だけど怠慢だってあるじゃないですか。はたらかないくせに保護だけは求める輩もいますからね。本気で探せば仕事なんて見つかるもんです。労働は恥ならず、小人閑居して不善をなす、ですよ」(49)

「節約なら日頃からできるでしょう」アーベントシュトゥンドは困ったように言った。「貧乏は恥ならず、大事なのは身だしなみを整えておくことです。新品を買う金がないのなら、古着をきれいにしておけばいいんだ。考えてもごらんなさい。車にでもひかれた日に、汚い下着を身に付けていたり、穴の開いた靴下を履いていたんでは、恰好が付かんでしょう」(50-51)

実際にヴァイオリンを手にしてジプシー音楽を演奏するヌッキーと、およそシュパーリング家の実情にそぐわない、わざとらしい言葉遣いの中で「ヴァイオリン」という語を口にするアーベントシュトゥンド氏は、対照的な人物として造形されたものと考えられる。たしかに両者とも、マルティンやマクセの父のように、本格的にエデの人生に影響力を行使し得る大人の男ではない。しかし男の子の成長にとって、垂直の関係で対峙し、乗り越えるべき存在である父親とは別に、やや斜めの位置から、適度な距離を取りつつ成長を見守ってくれる気楽なおじさんの存在もまた、欠くことができないのではないか。¹¹ 前章で論じた実父の超克、すなわち「父殺し」が少年の成長を決定付ける王道であることは誰もが認めるものとして、不要になれば捨てられ、交換される程度のおじさんとの関係にもまた、少年の成長が反映されるというのが論者の主張である。おじさんは少年に対し、責任を負うことなく、自由に振る舞える分、父よりも揺れ幅の大きい成人男子である。そして少年は彼らに飽きると、ドラスティックに取り替えることができる。なぜならおじさんは、父親のようにつねに少年と正面から向き合う必要などなく、少年の側から利用するしかないのだから。そういった意味で、論者はエデがアーベントシュトゥンド氏を「おもしろい奴」(53) のひと言で片付け、新たにウंकのおじのヌッキーに惹かれていく変化を、「おじさんの交換」と名付けたい。

アーベントシュトゥンド氏とヌッキーを対極的なおじさんで見なす論拠をもうひとつ指摘する。前者はマルティンに臨時の職を斡旋する際、明朝5時に自分の家に来れば「車で」(74) 職場に連れて行く、と告げる。それに対しヌッキーは、愛馬の引く馬車でエデの自転車泥棒を追いかける。

「ヌッキーさん、あいつが僕の自転車を盗んだんです」エデは興奮のあまり、なかなか言葉にならなかった。「ほら、あそこを走っています」

ヌッキーはエデが指した方に刺青のある手を動かし、耳の後ろをなでるとエデとウンクを馬に引き上げた。「それ」と叫んで鞭を打ち、ウンクが手綱を引いた。三人は必死に泥棒を追いかけた。(105)

マルティンは危うくアーベントシュトゥンド氏が用意した自動車に乗せられ、身の危険を伴うスト破りに連れて行かれるところだった。他方、エデは彼の新しいおじさん、ヌッキーの馬車に乗せてもらうことで、買ったばかりの自転車を取り戻すことができた。ふたりのおじさんの交通手段のコントラストはもとより、エデがその中間形態である自転車を、ヌッキーの馬車のおかげで取り戻す点にも注意したい。

ここまで「おじさんの交換」という観点から、エデとヌッキーの関係に焦点を当てて考察してきた。しかしウンクとの出会いを通じ、エデが心を寄せるシンティは、ヌッキーひとりではない。初めての新聞配達中、エデはウンクから、彼女が祖母や母といっしょにワゴン車で田舎に旅した際の話聞く。

(前略)「農家の人たちはあたしらに犬をけしかけてくるけど、田舎はお金がかからないからいいの。林檎もさくらんぼもプラムも木になっていて美味しいよ。川魚をひもで捕まえるんだ」

「それって泥棒じゃないか」エデはびっくりして大声を出した。危うく自転車のペダルを踏むのを忘れるところだった。(中略)

「あたしだって金持ちみたいにホテルで何メートルもあるメニューを見て注文したいよ。エデからは何も盗んでないじゃない。おなかか鳴っていて、林檎があるんだよ。魚が泳いでいるんだよ。バカじゃないの」ウンクは反論した。

「うん…。たしかにクラブンデさんは、何でもみんなのものだ、はたらく人は誰だっておなかいっぱいにならなきゃいけない、と言っていたしなあ」エデは認めた。(97)

機械に仕事を奪われる両大戦間期ベルリンの労働者の生活環境との対比として、機械以前の世界、すなわち原始共産制的なユートピアを、よりによって被差別者のシンティに仮託して持ち出すのは、あまりに非現実的であるばかりか、話を単純化していると批判せざるはられない。しかしウンクの語る田舎でのエピソードで重要なのは、彼女が父でもおじでもなく、祖母と母といっしょに出かけたと言っている点である。

ウンクとの出会いを通じ、「男の物語」を中心に展開してきたこの小説に、母系(女系)の原理が導入される意義は大きい。論者は物語の終盤、エデの仲介でマルティンとマクセの父、すなわち新旧ふたりの父親が初めて対面する場面に、この女性的な視点が取り入れ

られていると考える。突如現れたクラブンデ氏にコーヒーを勧めたいものの、シュパーリング家にはコーヒー豆がない。

(前略)「アーベントシュトゥンドみたいな奴と銀の器でコーヒーを飲むより、仲間と水を飲む方がいいですよ」

「でもオープンサンドくらい召し上がるでしょう」シュパーリング夫人はそう言いながらサンドウィッチを差し出した。

「とてもくつろいだ気分になりますね」クラブンデは手を伸ばした。「どうもありがとうございます。いただきます」

シュパーリング氏はぎこちなく立ち上がり、客に両手を差し出した。(122)

かつてエデが初めて訪れたクラブンデ家で「自分もこの家族の一員のように感じた」(61)のと同じように、マクセの父にも初めて訪れたシュパーリング家で同じ思いをさせているのは、序盤での伏線を活かした巧みな構成と言える。

この場面でクラブンデ氏が口にする「くつろいだ気分になる」という表現に、一般的な *sich zu Hause fühlen* (我が家にいるように感じる) ではなく、*sich wie bei Muttern fühlen* (母親の元にいるように感じる) が使われているのは目を引く。男同士の政治的な和解を演出する場面に「母親」(Mutter) という語が差し挟まれる違和感や唐突さを解消するのは、彼らにオープンサンドウィッチを差し出すシュパーリング夫人の母性だけではなく、小説全編にわたって「男の成長物語」を下支えしているウंकたち、母系のシンティー族の影響もあるのではないか。そう考えると、エデが成長過程で行なった「おじさんの交換」は、単に保守的な元郵政局長から馬車に乗ってヴァイオリンを奏でるシンティーへの乗り換えにとどまるものではなく、後者の新しいおじさんの背後に広がる女性原理の取り込みをも含んだ、価値観の大転換だったと結論付けられるのである。

『エデとウंक』が発表された1931年、ケストナーは同じくベルリンを舞台にした児童文学『点子ちゃんとアントン』*Pünktchen und Anton* を発表している。両作品の比較は別の機会に譲るとして、この作品の中でケストナーが年若な読者に宛てて書いた以下の記述は、ケストナーとウェディングの違いを考える上で、たいへん示唆に富んでいる。

もしも金持ちが、貧しいことがどんなにつらいか、子どもの頃から知っていたら、貧乏なんてもっと簡単になくせると思わないか。金持ちの子どもたちが、僕たちが大人になって父さんたちの銀行や土地、工場を受け継いだら、そこではたらく人たちの暮らしをもっとよくしてやるんだ、だって彼らは子どもの頃からの遊び仲間なんだもん、って言うと思わないか。¹²

ケストナーが（金持ちの）読者に求めたのは、急進的な「父殺し」ではなく、将来的に父の有する財産を継承し、それを貧しい者にも分配しようという漸進的な改革だった。さらに彼には父親とは別の立場から、少年の成長を付かず離れず見守ってくれる「おじさん」の存在意義を認める視点が欠けていた点は、ウェディングとの決定的な違いとして、最後に指摘しておきたい。

<注>

- 1 Vgl. Susanne Blumesberger u. Ernst Seibert (Hrsg.): *Alex Wedding (1905-1966) und die proletarische Kinder- und Jugendliteratur*. Wien (Praesens), 2008.
- 2 ウェディングの生涯については、Manfred Altner: Art. Alex Wedding. In: Kurt Franz, Günter Lange u. Franz-Josef Payrhuber (Hrsg.): *Kinder- und Jugendliteratur. Ein Lexikon*. Meitingen (Corian), 15. Erg.-Lfg., 2002, Susanne Alge: Alex Wedding zum 100. Geburtstag. In: *Salz. Zeitschrift für Literatur*. Jg. 30, Heft 119. Salzburg (Salzburger Literaturforum Leselampe), 2005, S. 40-47, Susanne Alge: Susanne Alge über Alex Wedding. In: Karl-Markus Gauß u. Arno Kleibel (Hrsg.): *Literatur und Kritik*. Nr. 397/398. Salzburg (Müller), 2005, S. 101-110 u. Susanne Blumesberger: Grenzenloses Schreiben, grenzenloses Denken. Die Schriftstellerin, Übersetzerin und Journalistin Grete Weiskopf (Alex Wedding). In: S. B. u. Ernst Seibert (Hrsg.): *Alex Wedding (1905-1966) und die proletarische Kinder- und Jugendliteratur*. Wien (Praesens), 2008, S. 13-40 を参照。
- 3 Malik については、長橋芙美子：革命勢力の知的結集の貯水池 —マーリク社に集まった人びと—、山口知三・平田達治・鎌田道生・長橋芙美子：『ナチス通りの出版社』、人文書院、1989年、225-281頁参照。なお、ウェディングの姉 Gertrud は、この出版社の設立者のひとりである Wieland Herzfelde と 1924年に結婚している。
- 4 Heinz Wegehaupt: Bibliographie der Veröffentlichungen Alex Weddings. In: Susanne Blumesberger u. Ernst Seibert (Hrsg.): *Alex Wedding (1905-1966) und die proletarische Kinder- und Jugendliteratur*. Wien (Praesens), 2008, S. 171-188, hier S. 172. 戦後の受容史も同論文に拠った。
- 5 Vgl. Dieter Wrobel: *Vergessene Texte der Moderne. Wiederentdeckungen für den Literaturunterricht*. Trier (WVT), 2010, S. 116. DEFA が製作し、Helmut Dziuba が監督したこの映画のタイトルは、Als Unku Edes Freundin war（ウンクがエデの友達だった時）。
- 6 Alex Wedding: *Ede und Unku*. Berlin (Neues Leben), 2005. 以下、作品からの引用は同書に拠り、括弧内にアラビア数字で頁数を記した。

- 7 Wrobel (Anm. 5), S. 122ff.
- 8 1883年に設立されたドイツの電機メーカー。Allgemeine Elektrizitäts-Gesellschaftの略。
- 9 Vgl. Wedding (Anm. 6), S. 124ff. ウェディングがエデとウンクのモデルについて公表したのは、戦後、東ドイツで出版された版に付された「まえがき」からである。
- 10 Vgl. Rahel Rosa Neubauer: Erna Lauenburger, genannt Unku. Das Schicksal der Titelheldin des Romans *Ede und Unku*. In: Susanne Blumesberger u. Ernst Seibert (Hrsg.): *Alex Wedding (1905-1966) und die proletarische Kinder- und Jugendliteratur*. Wien (Praesens), 2008, S. 123-142.
- 11 海野弘：『おじさん・おばさん論』、幻戯書房、2011年参照。
- 12 Erich Kästner: Pünktchen und Anton. In: Franz Josef Görtz (Hrsg.): *Erich Kästner Werke. Parole Emil. Romane für Kinder I*. München Wien (Hanser), 1998, S. 451-545, hier S. 492.

本研究はJSPS 科研費 24720151 および 15K02411 の助成を受けたものである。